

宗教意識研究の現状と課題～宗教意識から見る宗教の定義と尺度の問題～

ジュマリ・アラム(山口大学)

1. 宗教意識研究の問題点

従来の宗教意識研究は、おおよそ次のような尺度と、その前提となる宗教概念を用いていると見られる。

「宗教の所属性」もしくは「特定宗教の信者としての自覚」。たとえば宗教や信仰を「もっているか否か」「あるか否か」。制度的宗教／既成宗教／成立宗教、所属や従属関係が明確な世界宗教や宗教組織／教団とのかかわり。

「宗教的信念」もしくは「宗教觀」。たとえば「神や仏の存在と力」「創造主による人類の起源」「靈魂・精靈・祖靈・惡靈・死靈・幽靈などの靈の存在と力」「先祖とのつながり」「人間の運命・宿命」「罪・善惡・苦難」「死後の世界」「輪廻」「因果應報」「現世利益」「自然の力」などの事柄を信じるか否か、あるいは感じた（経験した）ことがあるか否か、またはその度合い。

「宗教的行動」もしくは「宗教的実践」。たとえば成立宗教や宗教組織の儀礼的義務の実践、民間信仰その他超自然的な世界との関係から生じる行為（たとえば日本においては「神棚や仏壇を拝むこと」「墓参りや初詣をすること」「お守りやお札をもらうこと」「おみくじを引いたり占いをしてもらったりすること」「クリスマスを祝うこと」など）に携わる頻度。

「宗教的スタンス」もしくは「宗教的態度」。たとえば宗教の「必要性」「重要性」「大切さ」「意義」「役割」「効果」「機能」「存在理由」「位置づけ」などの肯定的な（少なくとも否定的ではない）見方や評価。

こうした宗教意識研究・調査の実際の問題点。

【全般】 から の間の暗黙の「序列の力」。一例に、 は宗教意識に関する決定的（十分かつ必要）な指標であり、 が欠けて と が存在している場合はやや曖昧・希薄・物足りない宗教意識を物語っており、

が欠けて が存在している場合はきわめて低い宗教意識（あるいは宗教意識があるとは言えない状態）を表す。 尺度・指標としての問題

【インドネシア・ジャワ】 の自律性、 の依存性とバイアス。

【インドネシア・バリ】 の公式性、 と の多様性、 の曖昧性。

【日本】 の否定性（の風土） と の多様性、 の曖昧性。

結局、宗教とは「何か」「どのようにかたちで存在しているのか」「どのように捉えられるのか」という定義、存立構造、尺度の問題に立脚する。

2. 宗教と宗教性の諸側面

【宗教性】(Glock & Starkによる) A. 宗教的感情、B. 宗教的信念（上記に対応）C. 宗教的実践（上記に対応）D. 宗教的知識、E. 宗教的効果（上記に対応）。宗教意識研究における課題：Aの位置づけと測定（志向的意識と現象的意識の二面性の問題）、Dの依存性。

【宗教における機能と実体】機能：心理的／精神的機能、社会的／文化的機能、主知的機能。実体：人間の心に内在する「何か」。宗教の普遍性。「宗教的なヒト」(Homo Religiosus)。宗教経験の震源。Rudolf Ottoによるヌミノーゼ／ヌーメン、Carl Jungによる無意識／元型／神イメージ、William Jamesによる宗教的感情。宗教意識研究における課題：実体面の位置づけと扱い。

3 . 宗教表現

【宗教性の二つのモード】(Harvey Whitehouse による)。「教義的」doctrinal モードと「イメージ的」imagistic モード。記憶との関係(意味記憶 エピソード記憶)。儀礼の伝達(学習 繙承)。啓示方法(レトリック / 論理的 / 話術的 象徴的 / 多面的 / さまざまな方法に対応)。リーダーシップ(活発 消極的 / 欠如)。普及(急速 / 効率的 低速 / 非効率的)。構造(中央集権 非集権的)。宗教意識研究における課題 : 両モード、とりわけ後者の位置づけと測定。

4 . 宗教構造

宗教の重層 / 二重構造と宗教風土の問題 (ジャワ、バリ、日本のケース)

こうした状況から見ると、宗教意識を単独の事象として研究・調査することは、そもそも難しいのではないか。従来型の研究によって得られる宗教意識の実態は、多くの場合、社会的に成立している宗教概念と宗教構造 (宗教風土を含む) の下位に位置する意識に関するカテゴリーであるからである。宗教意識研究は、研究対象全体をおおよそ取り巻いている宗教構造の課題を先行した上で、はじめて一定の実態と比較の基準・軸が浮き彫りになるのではないか。